神代字原考

神字古事記

首卷

和書門	
類	一五一七一號
函	一七九
架	一三
冊	四

內閣文庫		
和書		
類	一五一七一號	
冊	四	
函	一三七	
架	一	

內閣文庫		
番號	和 15171	
冊數	4	(1)
函號	137	28

安傳記 卷一 冊九

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

此皇大御國者言靈能幸祐久累國爾
為而万之事物皆言辞耳氐言傳語継
介連婆道教亦言語道尓備絆麗憐然
者皇大御國迩者遺忘迺為爾判神字
謀雖有外國乃知文字乎以道教乎將
知等為古登無久神字乃瑳陀跡伽珥
低殊耳上古与喇韓文字乎用馴豆阿

禮婆先達亦上古爾文字無由乎云而
遂你國字者無事斗人丶思閑理然尓
近頃外國人能渡来志事始而与、喇萬
國者國字迺有事詳尓言舉斯而皇國
爾者国字乃無乎弘古圖伎喤呷押並
而外國刀同如迩言流累母耻伽志久
外國者文字乎以道教乎學那麗婆文

字專要乃物皇國者言語乎以道乎知
禮婆文字你不拘差別乎能心得而有
者亦說解者母不有故寂味氣無口惜
於毛母知須屢袁藤原政興神字乃有
之事炳爲乎言舉斯而神字古事記乎
記而世耳大皇國能光乎輝左伐也登
思奮起而有者甚嚴珎囉伽儞且美斯

吉心構也麿尓端書為而与登乞任是
亦國忠乃一端叙斗思幣婆其功績素
一筆如此南

明治四年布美月

神隨舍志留壽

鏑木櫟堂書

神代字原考

藤原政興謹撰述

懸巻もかしこき此乃皇大御國ハしも萬邦の本牟國ふして
天皇命を大地の大君主ふ坐まして天雲乃むらぶにろだり
谷蟆ぢ乃さはきいを四海八極を悉皆紗御て大御食つ國
を知食にふも有々る如此て天下ふをまつろハぬものなく
海山ををりてはろふる神隨此國乃所出生天之益人ハいふ
も更ふり蕃等も疾く歸化て雄武至尊ぢ大御稜威をろしこ
を大御心牟心として慎を敬ひ尊をて仕りろひ奉る理ふり
然をど古代を動すれを禍事起り害ふを異牟邪道のさだ

りなに滿廣ごりて世を亂したゞ〳〵ま大皇に背き奉ら醜
めき惡穢奴もあれどさちまちまちまうち罰ゑ賜ひ日神乃磐窟
處を出給ひし如く皇孫の神武大和魂奮發し給ひ大御光城
うゞやかし坐て此細矛知足國中に大宮柱太く築固安國と
鎮座百官百寮ハ如星列八十國嶋の人等も棹柁不干ふ禰滿
つゞけて寄集ひ朝廷へ獻貢て階下ま臣服日に夜乃奉仕是ハ
皇産靈神の幽契あるとまて中〳〵古を固より然る歟き道
ろ顯人まは容易知えぬ事どもふり
理ふりをては四海ハ波風もふく靜々く安穩ふふ故ま皇御
國の御國体ハ大地ゝ元首腦膸ふく万國乃綱紀ふれバ無窮
の寶祚ふり

或人云地ハ固より空中の一物ふして他ゝ星と異形ら
ゞ共ま日輪を心として旋轉是を公運一周と云て一年
也又私運一週あり是を一日也故ま日夜運轉止息ふ
く環の端ふきゞ如し何ぞ上下あらむ體象亦あらむや
又輿地圖ふど捻弄て云憐ふるうな日本ハまとふ小也
故ま日本を國とはいをゞ嶌といふふどいひて已をと
恐縮て却て我國を賤し色國の狹小を恥惕るゝとあざ
かも田鼠の猫聲を聞て屈敬拜伏するゞ如し是ハ實ま
思ひをりの管窺ふりかくて新論まも地之在天中。渾
然無端。宜如無方隅也。然凡物莫不有自然之形體而存焉。

而　神州居其首。故輻員不甚廣大。云云西洋諸蠻者。當其
股脛。故奔舶走舸莫遠而不至也。而至海中之地西夷名曰
亜墨利加洲者。則其背後。故其民愚顧。而不能有所爲。是皆
自然之形體也。と有るを信は然るとふり又國の廣狹大
小物の多寡を以て何ぞ國の尊卑美惡を論ハむやこゝを
本居翁乃數丈の大石も方寸の玉よ劣らぬ牛馬ハ
大きれども人よ劣らぬ國もいうはど廣大ふりとて惡
國ハ惡く狹小ふりとて美國を美ふり云云大小ないく
國ハ美惡をいをむや云云と言ゑとる如し
天照大御神の本於御國の大御光を輝さむとするに既く神

典よ著明ふり其を天地の初發の時とり高天原よ御坐まし
て天地を鎔造まし化育之祖天神諸命以て伊邪那岐伊邪那
美二柱大神よ此たゞよへるくふを修理固成と勅給き故妹
妹二柱神先初て自凝嶋を得給ひ此を國中の御柱天御柱と
見立給ひて蛭子粟嶋を生ア以然ゑを御言舉の前後顛倒よ
よりて不祥猶天神之御所よ參上てやゞて太占の卜相のま
ふ〳〵此大倭豊秋津嶋を生給ひまと八百万神群品をも生
ふし給ひき
佗國を枝葉ハさゞひふり其を水蛭淡嶋アと潮沫の凝
て成る國よしあれバ誠よは不良で子之例よ不入ふり

さる説或人の説は万國皆むうし舟路の不通時はおの
も〳〵自の國れ〻太古天地開闢の總て傳有し如く言
ふ事皆万國悉く同じこゝいふ皇國も亦彼説のごく此
國をこり大古の真傳有しと思ふ事万國の學を知らば
井蛙の如しと嘲り笑ふ輩もあれど是は却て蟊海の甚
去紀ふを其ハ此国のことを深く学て味ふべし其人〻は已ゞ御國乃古と
ふどハ夢よも知らぬもの多く信は性の惡なり彼夷人
そら皇國は来てハ我方のことを學びて稲荷様又八幡様
れ御生誕ハ如何して御功德ハ何〻ぞふどいひ又義經
公ハいろふふ功ありて如何ふる人ぞやふど〻如此と

を甚聞アく欲し又万國のことをも手廣く學ふ乃先自國
乃ことを委しく習ひ得て其上よて他國の學をそれども
我邦の人〻事先初發ら外國教を學び已こそ博學者
とと臭うごめかし姦しく言て自國の事は少しも知ら
ですこし様は思ひ却て皇國學ハ假字書れこよて迂遠
てあうぬふり學ねふ人ハ愚弱ふをのといへどいとう
をハら痛く笑し紀とふり
さ事はては天照日大御神月夜見神雌雄神生アし給ひ天照
大御神は天事を授給ひ日神又皇美麻命は天位を授給ふ
其時高光日大御神の大御手は天於日嗣の寶璽八咫鏡を捧

持して吾皇孫命の萬千秋の長秋と天地と共無窮と所治看國ふりと勅給ひて葦原の瑞穂國を授給ふこれより皇國を天紗不易と天位を今に傳て變らせ給ハぬもと其大御故事れ起原と神魯岐神魯美産靈二柱大神の元より所預知看ゑし故事を皇美麻命の天降坐時に大御口つうらと御言依し賜ひしを彌遠長と聞繼ぎ語繼ぎ傳ヲ来つるとふも有ける

天照大御神の御皇紗連緜百皇一世れ如く天地日月と共彌常磐と照し明と所知看故万古と動無き御國体と して御一系不變ハ世界万國と無比例ことふり然れバ此一事を以ても万事多言とハ及バざるふり

然る故と万づれ物事も皆万國と秀で勝れて美さ乞ハ更なりとと古語と言靈の幸はふ國言靈の祐く坐國と稱へ来て宇都志世人の音韻言語の道遥と万國と優ヲて正ゑく清朗足ひ調へるを無比類字内の一奇事れりさる故とこそ外國のとく言痛く何事ふも理ふどを説諭し理を以て事物を粧飾ひるとふく事理とふ言語のうへと有ふヲ又人の智もて事物を定む屋ふもれに非れバ皇國を大寛とて言痛ハ言舉をば故古語と葦原の水穂の國を神ふぢら言舉せぬ國といへり皇國ハ固言辞のうへり靈備ハりあをバ言舉をばても其事その物とつきて其とり知らるふり百皇一世の御國体と此言辞

の妙ハ万邦ニ無比例とふり

言靈の事ハ豊蘆舘の傳ニとよくをしくて顯幽兩途明亮ニ分説給へバ實ニ本教の神理幽契をもうかゞふり足りぬむ其ハ彼家説を聽聞て知るべし

さ爲言靈の幸ヒへ祐くる國ふるゝらふ万事言辭ニあれバ外國の如く文字ニ預らぢさ爲文字のちさもれく古来より上古の世文字未有の説ふども見へされども上古ニ皇國の文字有しと炳焉ふり其ハ圖書寮ニありし梵字躰の書肥人書薩人書ふどの有し共以て少も疑ふゝれバ今更ニ論ふをざニはあらぢ然ヒど齋部廣成宿禰の古語拾遺序ニ上古之世未有文字云云ア〻さ三善清行の勘文に上古之事出ロ傳ニと云ひ大江匡房の筥崎宮記一條禪閤兼良公の日本紀纂疏北畠親房卿乃神皇正紗紀等ニも我上古ニ文字無ふ趣ニ言ヒたる此等の諸説を證據として貝原篤信ゲ自娛集及太宰純ゲ和讀要領ふどニ我邦上古無文字事ハ先賢の説明白也と如此世の事識人の言定めし故何も事知ら岩下賤愚昧のをのふどハさるふとニ思ひいア〻一字半点も不見常ニ世ふ用ひざれバ全く無ふ事に思ひさ爲ニ見ともわらぬ故蚯蚓の如く見る外ふしといひて嘲り笑ふのミれり今上件ニ擧る博識の人等ハ深く思ハぢ漢字ゆ〻文字と思ふ〻

無誓の甚しきふり其ハ先ト部姜方宿禰の釋日本記の開題に云問考讀此書將以何書備其調度哉此書とは今の日本書紀を言ふ下こゝ倣ふ

答師説先代舊事本紀上宮記古事記大倭本紀假名日本紀等是也といへるに又問假名日本紀何人所作哉又此書先後如何答師説元慶説云爲讀此書私所注出也作者未詳又問假名本元来可在爲嬬其假名養老年中更撰此書然則爲讀此書也不可謂私記是等ハ平田大人の古史徴開題記の神世文字れ論といふ條に委しつきて見るべし答所疑有理但未見其作者云云今案假名本世有二部其一部者和漢之字相雜用之其一部者專用假名倭言之類上宮記之假名已在舊事本紀之前古事記之假名亦在此書之前可謂假名之本在此書之前或書云養老四年令安麿等撰録日本紀之時古語假名之書雖有數十家皆以勅語爲先然則假名之本尤在此前耳又問假名起當在何世哉

然れバ假名日本紀は今のゐつる日本書紀をり先ふることゝ炳焉しさて其書の体裁ハ如何ゐ有々むと考るに其本二部ありて一部ハ和字と漢字を雜へ用ひ一部ハ假名の倭言の類を用ひゐりと云此假名ハ疑ふく神字の事と聞ゆ書紀の前ゐは片假名五十字又空海のいろは字等ハ無々れバふり和字の神字ふるゐ下ゐ云へると考合すべし此前項アでハ用ひ来しと見も和字を神

字といはさるハ今の以呂波字と混ふめれバなり既に此以前迄常に用ひし故神字といはゞ唯和字とハいへふなるべし

答神功皇后以前文書不傳已無所見至于應神天皇御宇遣使新羅招来文人僅習文字然則自彼御時可在之

抑漢字の皇國に渡来る最初ハ然有る如く輕嶋明宮に天下知し看しゝ應神天皇の御世十五年八月百濟國より阿直岐を召し又王仁といふ二人の博士を召して宇治稚郎子命僅に習給ひ論語千字文等をも貢獻せるなど御書に見へて然る事なり

答師説大藏省御書中有肥人之字六七枚許先帝於御書所令寫給其字皆用假名或其字未明或乃川等字明見之若以彼可為始歟

然いへば肥人書ハ神世の假名の事にて真草諸体有しなるべし（そは既に六七枚も有しバ僅に五十字許の字数をいふに大字に書ても二三体有しと論ひ）なし其項も既にうつろふ字の世に少なしと見えて中には讀かねさるも有りしと聞ゆ故に或ハ其字未明歟有ぞかくて乃川等字明見之と云へるハ其中に多く常に用ふ假字にも符合が明に知らさぬよしなりそは乃は乃乃乃川。を乃川なとやうに書て有りしと見ゆ此豊肥國

人の書し神字れ草書よして中つ世とヨ書傳さるふり
先師説云漢字傳来我朝者應神天皇御宇也於和字者其起可
在神代歟龜卜之術者起自神代所謂此紀一書之説陰陽二神
生蛭兒天神以太占而卜之乃卜定時日而降之無文字者豈可
成卜哉作者事濫觴可在神代者幽玄而難測伊呂波者弘法大
師作之由申傳歟此者自昔傳来之和字於伊呂波尓被作成之
起也

さて漢字を用ふることを應神天皇の御世より出い牙
る毫然るとふり其は日本紀アと古事記等よを見ゆれ
ども更よ論ふしたて於和字者其起可在神代歟といふこ

の和字も神代文字を言へる事よて伊呂波假字等よは
無ことい可在神代歟と有ふていと明白ふりこくて龜
卜之術者起自神代云云と有るふは傳への誤ヨしを其儘
並擧たるふらむ龜卜ハ韓國の卜法よて神代尓毫曾て
ふき事ふり鹿卜れ業ハアとに有しを中古の項とり龜
甲よ代て用ひ来しふり其は鹿の肩骨を灼とり龜甲の
方便りとき故ふり叔アと此紀の述義ふ云

太占

私記曰問是何占哉荅是卜之謂也上古之時未用龜甲卜以鹿
肩骨而用也謂之フト丁尓又問山海草木皆是二神之所生也

而未見産禽獸之文然則此鹿何時生哉答今如此文不詳禽獸
初育之時云云
と答へし如く神代は龜トの無き事知べし故伊吹舍大
人の古史徵文字論の説に釋紀の首巻は問答の説乃多
ちは其中は一ツの問は異形る答説の二ツ三ツある事
を一人れ答へとしては心得ぬ事ふるに就て案は
此を釋紀の撰者兼方の答はあらで古人の説くを擧
て其事ハ左いへる説も有は右云へは説を有はと其説
の有れとく並擧たる物とおもゆ其は兼方一人の答説
ふらむふは如此を有はじき謂ふまで形りふは言はぬ

本文の釋ふはい故も私記を始めまで古人れ説を擧て
自の案をも別は兼方按と云へるをを思ひ合にべしか
ら也で彼首巻ふ擧さる説等ハ古人の説を並擧たるふ
ふと疑ふく云云といをれし如く龜トふどまさ折く異
ふる答も有ど其ハ心して見はべなり偖又此紀日本書紀
のこ一書之説陰陽二神生蛭兒天神以太占而卜之云云
無文字者豈可成ト哉と云へはハ彼二柱の大神蛭子を
生戸して天神の太兆ト相給ふ時は文字無くも御ト
の成ぬと紀由をいへるは富信は當也る説ふり此を整
も〳〵太占の最初よて如此て古れ時の御トに文字ふ
くてハ成ぬときといふは信は

當るといふをいぶかしく思ふ人もあれどもよい中〳〵よ煩はしくて訓がさゝぬ今おばらく洩らしたる其ハ予が別よ言へる時あり然れと下もよ少しく言へる處あるべよく心留て見べしいとをゝしく尊き御術ホこ考然を鹿トばゝり太占と思ふハ非事ふりをべて測ル難ム神の御心なうぐふ術よて何よまれ御トの顯ハし安き器こそそれまゝ作者事濫觴可在神代者幽玄而難測ハも真ゆ能當る説ふり作者ハ測ゆ為しと云へる故害なしこを思兼神の御作ぞと思ひ混ふぞ其は固有ゆ自然の圖を初めて八意の神ゆ石窟戸よて鹿占の大兆を擬ふ事業よりて驗體よ畫著し給ふよて御作といふよはあらぢゝし且伊呂波

者弘法大師作之由申傳歟此者自昔傳来之和字於伊呂波ホ被作成之起也と言へふハは諸書ホ見えて童兒さへあ戸孫く知る如く弘法大師の作る事更論ふしさて彼古史徴よ漢字れ草書を撫ひて神字の書風よ製ゆ直しゝむゆ昔をり傳来る和字を以呂波よ作成せりとハ言傳為りけむと其注に和字とは神字のと云云漢字の草書を神字の風ふふらひて作成せるふるゆ纂疏よ漢字を假て和字と形ゆと有よ思ひ合せて悟べし云云といをれし如く然ホとにこそ

ちゝ又予が祖父政守ゆ考著せる古語止草と題號せる物よ

古語止草ハ總て三巻あるが其うちは我皇國を上古に
文字ふしといへる説をいさく憤して我上代は文字有り
しといふこを釋紀なをじ名文字論等の諸書を精しく
論ひ定め説をし物ありされどあらはは所狭くて煩ハ
しかも名予ぞ別はいへる時あれバ今大概は洩し扨
種々論ひ忌部正通の神代口訣を舉て神代字象形也といへ
る象形ハ緞バ日を○月を☽星を●山川を川のやう又い
ハ井ろハ口はハ葉の如くあらろ印は畫るふらむゥ又氣魅
舎れ翁の説は上に引ける口訣の文と釋紀は和字の興を問へ
ば答の其一に師説大藏省御書中有肥人之字六七枚許云云

と見えさる二説を合せて考るに其事物の象形を畫さると
口は出る音くの印ふ作る假字との二種はふむ有りそる其は
口訣は象形と云へるは漢字は六義と云へるこをの有ふ六義を六書と
をい其一ふて説文序は象形者畫成其物隨體詰詘日月是也
と有て日月魚鳥馬車ふどの字れ古躰を直に其物の形を象
ゞて畫るを云へゞ然をバ我ゞ神世はも此一体ゞをしたと著
明ふり云云さて象形の字ハ人も思ひ扨きて畫き出べき物
ふる故に戎人も畫たをど
此を今世はも都て字を知ざる人の記え居らで叶ざる
こをハ一の印ふはくと記き二の印はこと記き外乃

印よは□を畫き玉の印よは○を畫くゑぞひの多うふ
を見て和漢の上古をも推察るべし此□○やゞて象形
の字ふるをや云云政興云此□○大きぞ信よ字原の起り
ふと其ハ下よ論ふを待て見べし
限ふき事物の象形を盡く畫むとハ煩しく勞うはしきふと
ふる故よ口より出る音の印を形ようゆして假字を製と給
ふ
牙り來む
字々音れ數かど印せるむゝり便をきはふし然るを漢
國よゝ字多くて却て便惡く煩はしき由ハ縣居大人鈴
屋大人の既よ委く辨られさるゞ如しとゝ西洋人も甚

々漢文字を笑ひて漢人ハ餘と字を多く製と生涯
已ゞ國字を知盡ぬと缺をぬと云へるをも思ふぬし政
興按ふよ象形ハ上古に和も漢も皆各〻其れ〴〵の心
ゐるしふ畫しふらむ字の如く數のきまり有よ所ぬ
固とりゝぎと無き象をそれ〴〵の心おぼえよ縦バ○
を日又玉□坎ろ又外のやうに人〻の心〻よ印をしふ
らむ易畧例よ夫象者出意者也。又言生於象象生於意と
有又考ふるふ我上古の下民ふどハあまりよ神字ハ用
ひぬとしと見も象形こそ用ひしふれ外國の如く文字
のゝ尊ひ教の料とそれど皇國ハ言靈の神れ幸と大ら

らにいひたさへ語と傳へ来しかれば假字ハ多く用ひ
ぞとも事ハ足りかむ其ハ政守れ古語止草に上代ハ天
子よりらざれバ書を製せばようやく工方のを神字を
扱ひ給ひし故田舎の農夫かどハあさりよ取扱事乃あ
らざれバ漢字傳来の後よハ上代の字ハらにろよ成て
有無をも知らざりしからむ
此を假名と云へる義を音の印を仮よ書て象形の字れ真よ其
物の形を畫さる字よ對さる稱かるべし云云ちて字を形と
いふ義を名かりそれ名とは業の省言よて事物よ負さ符
印をいふ言と聞ゆるをを名と云ハ事にアを物よアれ此を

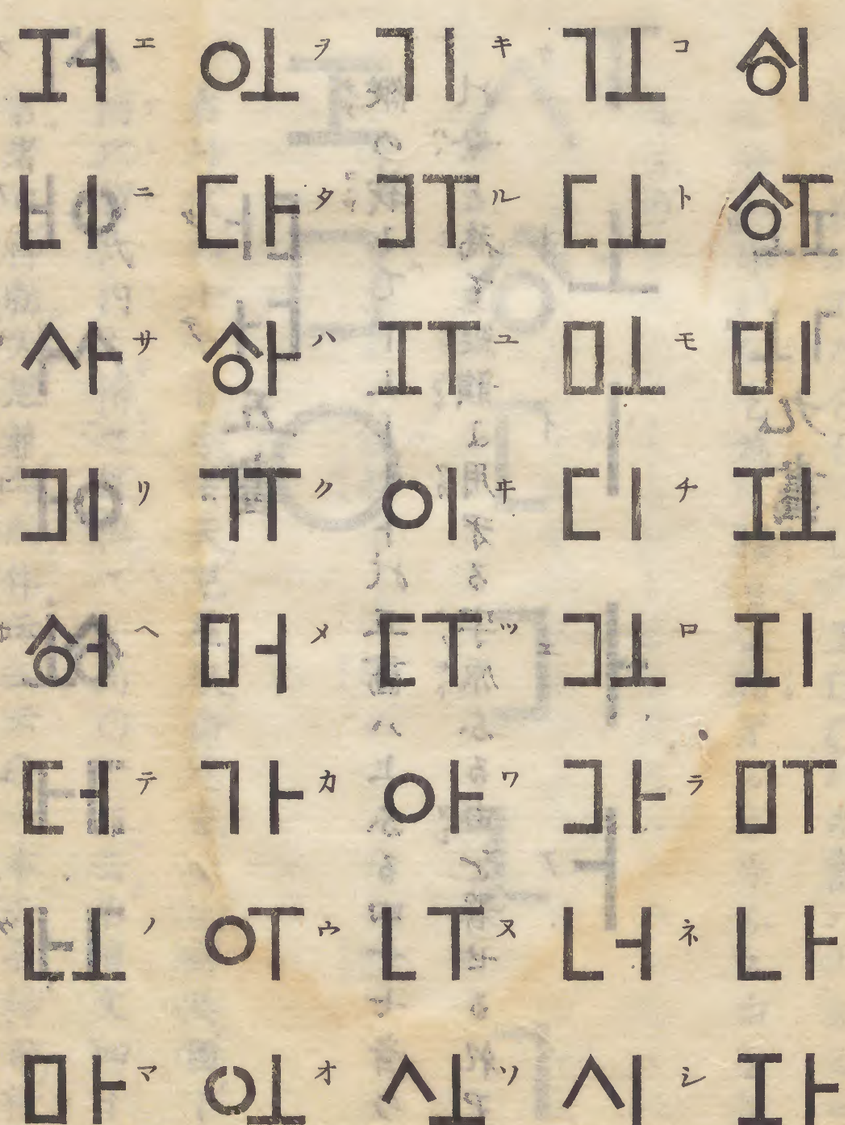
某の事其ハ此の事と知ばか料よ作を る故からむ
よさ按よ成の畧語よて事を記し成に由ら皇國に本よ
り字乃無らむかを唯よ漢語のまゝに字と云て那とい
ふ訓の有べくを非ず
如此在バ真字といふも象形の字をいふ固との古言かりを
むを漢字ばか専に用ふる世とかりて彼ハ字ごとよ義あとて
音の符と製れふ神世の假字と異かるもの故よ彼をいふ稱
とはかりよけむ
神世の假字ハ筆れ運びのかざらうかりしと聞ゆるを
同じ神世乃字とハ云オども象形の字は自らよ畫か

おくおどして事痛き狀ふ見えれむ故ゑ真字と云ひし
を云云と有よつきて政興云真字と云も象形の字をい
ふ本よりの古言ありとこゝにそらく言れさまど此
ハ未ざ神字の真草等れ諸躰ありしをも得らまゑ日文
の傳をも著ハさゞまし以前故うくハいをれされど神
字の真書とハ아미の如くふして是ぞはをれ字元ふり
其は下り言を見るべし又圖書寮に有し梵字躰肥人書薩人書等を
多くハ神世假字の行草等の書ふるべしそはいのの
如くゑ書るふり是も이이이をりくづれ出しをふて行
草等ハ諸家の傳才各〻異ふる如くふれどさゑも非ゑ

いのの又いのいのの等の如聊〻異ふるを寫人の
漸〻りくづし又書々る人も自然ふくぢし書ふりかく
て世れ常ゑ用便の字ハ草書なを簡易ふるゑよりて上
古も多く草書ゑて用便をしと見ゆ其は今ゑ其書の多
ゑゑて知べく又西洋ゑても恒ゑハ草書にてかゝゐを
も思ひ合をべし
ちて近世神代文字とて何某の秘藏某の社傳と云ひもてを
やにを見るに皆符文梵字やうの異字異体ゑしてはをの神
字ハ少し實ゑもと思れぬ疑字のゝぞ多ふる尤まをふは
信の神字、艸書とおぞしゑも見もをど大うさハ取處ふれ彼、

偽經又神道傳秘翁等は偽作ふして附會の説のゑ多しされど古社の神庫ふどよは傳ゑる實の字も多うるべしちつくいと近ふ頃よも神代の文字として種〻取集へ左ふ右くに論ひ辨へ世ふも弘く傳へむと功ゑを成せる人も多うれバ愛をく雄しき志よは思ゑどゑ其字原の起ハ全ゑ備ハらぢいかふる神理ぞと委しく解々る説のふけれバゑハ如何ふといぶちり惑へる人も多し然ハ平田大人の考へ著されし神字日文傳ふ

○日文四十七音



수 ス　아 ア　서 セ　어 ユ　호 ホ　러 レ　거 ケ

다 タ　더 テ　五畫

縦の義にてㅜㅗㅣㅓㅏの五畫ハ上なる四十七音の字の母と為て縦韻に用ゆる字原なる由を著せるの也

ㅜ ウ　ㅗ オ　ㅣ イ　ㅓ エ　ㅏ ア

ㅛ ヨ　교 コ　九畫

横の義にてㅅㅎㄷㄹㄴㄱㅍㅁㅇの九畫ハ上なる四十七音の字の父と為て横音に用ゆる字原なる由を著せるなり

ㅅ ス　ㅎ フ　ㄷ ツ　ㄹ ル　ㄴ ヌ　ㄱ ク

ㅍ ユ　ㅁ ム　ㅇ ウ

右神代四十七音字者天兒屋根命之真傳也對馬國卜部阿比留氏内ゝ傳之可秘ゝゝ焉○一本云右日文四十七言者日神勅天思兼命所作云云○一本云右神世行之

中古所謂肥人書也云云右の日文四十七字を行文と有れど真字と見も此を傳へさる阿比留氏を對馬國卜部と有れど天兒屋根命の裔ふると疑ふし（對馬國の卜部ハ天兒屋根命十一世孫雷大臣命より出さり云く）

如此て此ハ太兆法の驗躰を十。此の如く書は誤よて極て十。如此ふらむと所思るふとそも〳〵麻知形と云を田。斯有る形を言ひ辻ふど云を思ふよも十ふるふと炳焉く云云其本原を必ふ。ふるぼく思ひ定めさり此を最く幽き謂あるふとふるを云云さて此字原を太兆さり出さると疑ふく所思る由ハ縦の五畫は驗形の十を裂て作れるふく十。は十を左右二ゟ別ち一。を中の一。を去り上。は十。の一。を下よつけ丁。を十。れ一。を上よ付さる物ふるぼし横の九畫は田。さり出さるふて先〇。を口。な圓よ象どり工。を十。の中れ一。を中断して上下よ付け丁。。L。ハ口。を斜よ裂さふ本れ形をその儘よ二畫よ別ち用ひさりと見え口。L。ハ口。を縦よ真中を裂て二畫よ為さるふり〇。ハ口。を斜よ裂さる上の一畫を〇。よ象とれるよ冠らをへハ。ハ口。を斜よ裂ふる下の一畫を其儘ふ引起しさる物と見えさり（但此を唯りうち見さる有ればまふ〳〵言るふれバ中よは當らざるも有ぼ々れ上件四十七音の字を六の五ど後人をく考へて定むべし）畫九畫を縦母横父よ用ひて作れる故よ日文とは言ふふる

べし然るを日文とは火文の義ふて廐の肩骨を波く迦の木
に火もて灼てその火坼の食べき文を音の符印と為さるを
り出さる言と見ゆ云云偖一本の奥書ふ此を肥人書也と言
ふるも由ることれと云云古の遺文ふ[illegible]と表をる
父母の字原の次第りよりて五十韻の圖を作と試るふ左の
如く成ると云云

○神代字原考

○ ウ	□ ム
ㅇㅜ ウ	ㅁㅜ ム
ㅇㅗ ヲ	ㅁㅗ モ
ㅇㅣ 平	ㅁㅣ ミ
ㅇㅓ エ	ㅁㅓ メ
ㅇㅏ ワ	ㅁㅏ マ

古昔今、世に弘く圖に傳ふる五十音圖の位とハ甚く異形と此、項見もる北邊隨筆といふ物に悉曇家にハ阿、音を本とそれど云云五十、音れ本を宇ふること疑ふしといへと此、説云云然るとふり

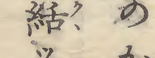
ちて右れ日文四十七字を縱横父母の字原の位によりて著せる五十音、圖に合を見るふ ㅁㅗ ㅇㅏの二字餘れと此を視るに

縱畫れ ㅗ ㅏは例の如くふれども横畫の中ふに畫ふるずいと不審きふ故に考ふるに ㅜ ㅗ ㅣ ㅓ ㅏれ五畫ハあら母字に用ふるのみにて此を一音に用ふること無れば四十七音に於阿の二字足ざる故に別ふ ㅁㅗ ㅇㅏの二字を作と給へる物ふる歟しかくて此、二字を ㅁㅗ ㅇㅏの字れ父畫ふる○れ上を裂放ちさる物と見ゆ志ら物し給ふる神の御意を知ぢら祢ど強ひて案ふに ㅁㅗ ㅇㅏを發音の初に自然に宇を含みさる音ふる故に於阿ハ其、宇を開き去りさる音ふりといふ義をもて○れ上を裂に開きさる物ふらむら然れど此を試に言ふれど尚なく考へて決むば此々あまりに長く志なをふれどもなこと

もらでいえあるまじきことなれば摘出たるあり上は古史徵を引々る所も同しともに文意をつゞめて擧げされバ各く本書はきて見けべし如此精しく論ひ辨へらるしも實に然たるあと

ふて此書の貴記事ハ今更論ふまもあら私ど能くも深く考へ著されしいとを甚もうしこく奇妙ふり其ハ外はかく正しく明らかく說書のふけれぞふり若ふを著し諭給ざるぞ空しく神匱ようもれて世はハ出ざるを偏は言靈の幸と此大々の功とによりてかく再び世はもかゞやき出しふるバ神字は志ある人ハふを頂は捧持て拜讀ふたゞらむやも然ゞど又ふゝりいと近き項豊蔑館の學黌ふく神字原を考訂されしを見るは嗚呼奇靈ふるうも妙なるかを是も鬼神も夜哭々むゝと思ふ不ど實は幽ふ神理のたる字原ふして世界萬國の大元の字はして此を誰しも諾ふハばふものあらむ又惑へるとのもたらむや實は諾ひうしこむべし外國くのたうしら人も感信をべふぞと思ふ其圖をされぞし

是を靈形といふあのかさちといふ言ぞ也如此て方圓を十字ふて締結る然は中の十字

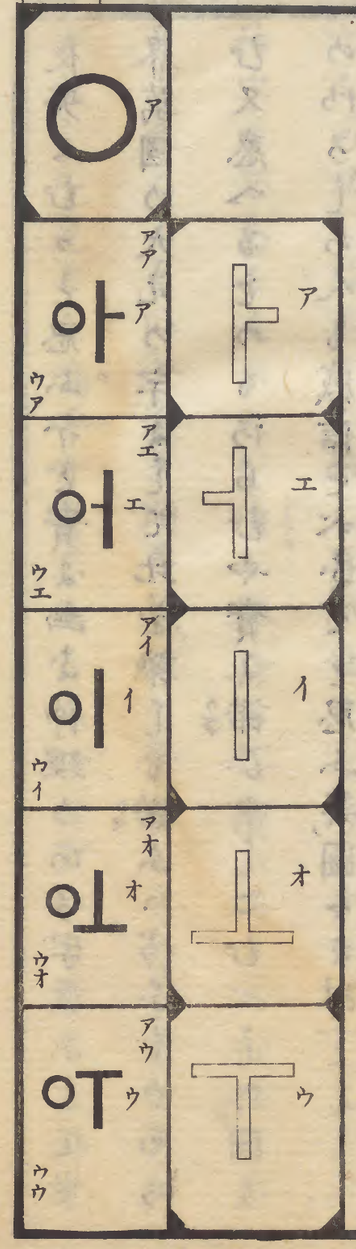


五箇は分剖て五母韻五母聲と成是萬聲の本ふりまゝを幽音五箇のうちにいとてあれど八々字原の割出しは口をり出で○よと出ざれぞこはいかにたらむ神隨の理ふ違ふべくも非るふ就て塾〳〵考ふる決ぞて如此ふらむ其はしこのとく合ぬ事ふり又伊吹迺舍

五箇は政興按ふ八の字

再訂の旧文傳五十音訂正圖ふどよ太概最上ホ擧ケさる如くよて唯〇字を〈〉ちくゝ改められどペ〈〉ホ〇のホくてそ幽音五箇の中よをいらざるホり然バ今更ホ訂正を加え前圖と校合乃さ色下よ圖を作ヨまさ字原の割出し找も著よホとあホろこれと五母混合して幽音の二十五聲を生ミ顯しこ〳〵ろ

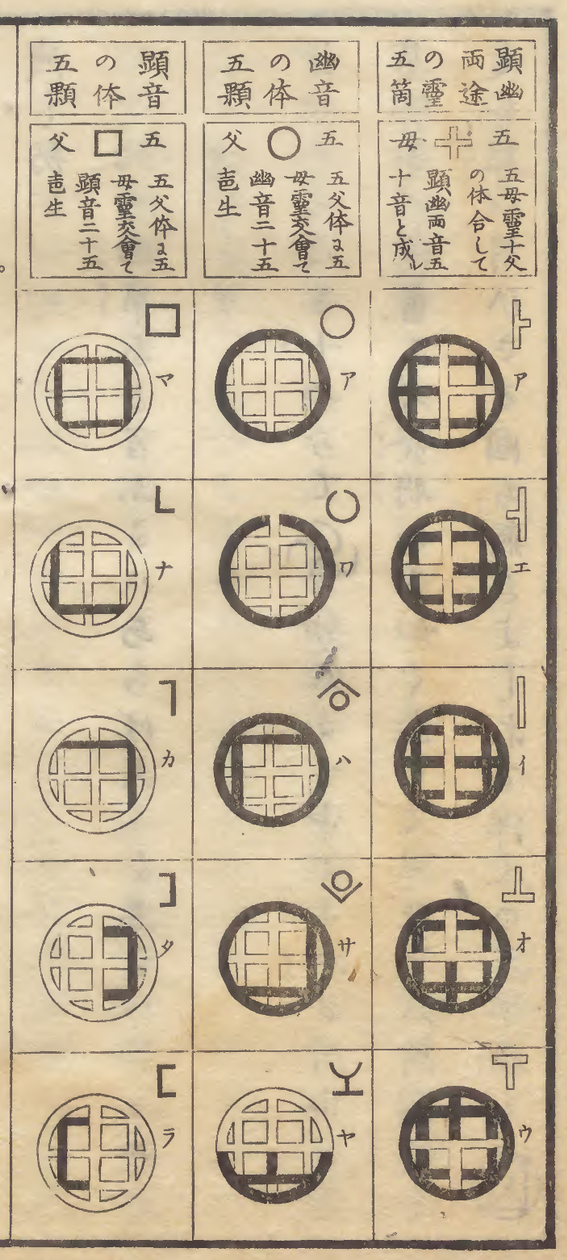
□ㄴㄱㄷㄹ五箇よ分ワれて五父の音聲と成ル五母と混合して顯音の二十五聲を生む然シて父母縱横の字原れ次第よりて五十韻の圖を作ヨハ左の如く成ルホり



音の廿五敲

の廿五敲

されぞ世の常ゝ有ル五十音の圖とハ位の甚ク異ふるを見故べしさて字元の割出しゝさハ上ゝ擧ル平田大人の考論されし如くふり然レと今初學の童朦の為ゝ捷徑ク早く分ヒ安く示ヒを左の圖れ如し



然レ乎信ゝ𝍏かくふくてを得有ルまじき事ふり々り其ハ上ゝ擧ゲさるどく平田翁の字原を考ヘさる説ゝ口を○にも見ふを由ヨシふれどおは一ツ口を二ツゝ見立る業ワザふれバ別ゝ○れふくてハうあいぬをふりされど古史徵ゝハ口○はやゞて

象形の字ふるをやと言されし也又漢籍淮南子ゑ天道曰〇
地道曰□方者主幽圓者主明明者吐氣幽者含氣云云とあれ
どゐは方者主顯圓者主幽といへる誤ふらむうさて十字も
中くゑ奇しき神理有されども此ゑ言ふべきゑあらねば皆
洩し故
此ハ祕事ふど言ふゑハあらぢゑ混らハしきゆゑ
洩しさり
伊吹舍大人も十やゐて卐如此ゑて中くゑ幽き所由有趣
易暦等ゑ諸書ゑ考發明さる如くふり又洋漢竺諸萬國共ゑ
是を尊び用ひざる國ゐ無きよしふて洋人の文字原も ⊠

をり割出せるゑつき ⊞ の萬國大元ふるゑ著明ふり然バ
天故神の彼國くへも賦配給ひしふらむ偖中の X ハ國躰ゑ
をつゐ十を斜ゑ為ゐ故ゑ其横文字も皆斜ふり其ゐ ABC
DEFGHIJ の如く雨のふぐゐさるようふり然どゐは
以太利体の大字ゑて斜ゑりきしふり是を其儘引興しさる
ハ ABCDEFGHIJ 云云とふるゐは羅瑪体の大字也
さて又鶴峯戊申の嘉永刪定文字考ゑ成形圖說宂市四十七
字を信として考得さる字原ありり其を見るに ⊠ 如此是ゑ
り七下上等の四十七字を割出せるふりこの主れ外ゑも鍥
木文字考又別ゑ刪定神代文字考等著されし如く功しゐ骨

折らせさる志は愛しく艶しき業ふれど其説ふ土箇をり出せし天名地鎮と言字ふて大宍持神の大宍持ハ大麻知の宍をもろしめに称のとうふ加く附會の説多し土箇の字ハ平田翁の疑字篇ふも見へさり然せど其末り

を論ひ

をも蘭學家高野瑞華ホも語りしに瑞華云奇異ふる哉吾嘗て蘭字の割出せるを長崎ふても質しさりしふ相違無きをふりといヲり然バおそ大皇國の字元をり出さるを上の條ゝふうるさくも云へる如し又文字の有無ふどハ論ふふ疑らに諸大人等の考著せし功ふより晴て白日の如く明らかに知らえさるふり然ハ在れど今世の恒ふ一文字だふ用ハぞ書ふきへ一枚ふりとも書々る物ふきを見て博識の人といへども彼夏の虫ハ氷を疑如くあやぶをし故まして庸人をや我日本ふを昔をり文字てふ物無ふ皆韓をり渡来せる物ふりふど〻いひ又近頃ハ漸ゝ益々ふ外國國の學びハ盛ふ成以て来し故國くの字を以て教獨逸の英吉利のと日に月ふ開き成ふ付てハ我神州固有ハうるをし き神字を用ひてもうふらむを其は世ふ國學者と稱へる人さへふ空でを讀得ざるをや故俗人等の言ふふハ神字の縦有ふもせを世ふ用ひぞ物の用ふさらぞハ無ふも同前ふり といヲり

熟世間の人ハ云ふを按ふる神字の有ふを知者萬人ふ

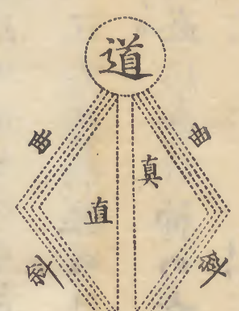
一人有や無や既に事を辨さんも辨へぬ人も皇國とき
へ云へ愚の如く云ひ文字ハ皆漢より来て僅にいろ
はさへ弘法大師が涅槃經内四句の文れ心を歌に作り
梵字を草に略し作りしかりなどアさ皇漢初學者論ち
ふを聞に皆文字ふき事にて負けるハ神字のよしを知ら
ざれバ是非もふし其いうふりくに學有て文字ふくて
愛あらぬとふり皇國ハ言靈の幸をひゑにくる國にて
文字にとりて事をとれまへむとにる萬國とおふじか
らざる縁故ハと長々れバいをざれども文字も遺亡の
さめに有て國字の無といふにハあらず神字の有し事

れをし又神字製作のとれをあらアし此書にたるして
初學の為に
實に千とせれ後にハ神字の隠蔽(カクレ)をて字論も文庫(フグラ)に埋(ウズモレ)ふむ
ともやあらむゝと已をぢふき身ふれど甚(イト)も慨(ウレ)さく悲歎(ナゲカ)し
く思ひ今外教の縺糸の如ふ字を學べるもれ多きハ政興ハ
麗(ウルハ)し紀神字以て一(ト)枚ふり何をう書識(カキシリ)て訣(ミ)アやしくて按ふ
に古き祝詞又古事記等の書れ上古ふゝ真(マコト)の神字ふて書(キ)さ
ア(ア)し事ハ今更云アでもふゝれど日本紀に帝王紀の跋に
推古天皇御宇(ニ)聖德太子始(テ)以(テ)漢字(ラ)附(ス)神代之文字傍(ニ)又ト部家
の舊(キ)説に欽明天皇吾(カ)國の文字を止(ヤ)めて韓字のみ通用をべ

しと常磐大連ゑ勅して神代をり傳来の古書を韓字をもて書代へさせ給ふゑカミヨといふ和字ゑ神代乃二字を附けアマテラスといふ和字の傍ゑ天照の二字を加けうくの如く和字の傍ゑ韓字を悉く付しかり又古史徴開題記ふ古史二典の論下といふ条乃悉しく記せるを少く旨とある處を抄出し加るかり文字あゑて物記さゞる時おろは必ず本より其字もて譬へゞ鎮火祭詞ゑて言はゞカムイザナギイザナミノミコトイモセフタハシラトツギタマヒテ云云とやうふ此間の語れまゝゑ記さりゑむかと疑ふし然るを漢字わさりて後ゑ其字の音を假ゑ用ひて加牟伊佐奈伎伊佐奈美乃美古斗伊毛世布多波志良斗都伎多麻比豆とやうふ固有の字ふ替て記ゑゑけむな漸くふ漢字の義理をも知て神伊佐奈伎伊佐奈美乃命妹背二柱嫁継給豆とやうに記せり也所思也此中ゑ神二柱嫁継給ふどハを

く字義ゑ知得されど美古斗ホ命字ゑ書るハ姑く訓を借て書る借字なりと記されしを實ゑ然在事とおぼえさりけゝ古事記の元ハ神字ふりしを上ゑ種く言ゑる説ゑていと詳ふり然ど今又更ゑ神字以て寫さむとにるふ此古事記を撰べる太朝臣安萬侶の序ふ全以音連者事趣更長と有如く神字のミを以てうつしてハ字數の多くふりて其文の長くしくふれバ今世の精勵學の繁き辰風ゑハいろゑと惑ひ思

なならむかされど熟考るに外國々の書籍もいと細かに音をつらねて長く書しハ勞がはしき業なりたとへバ御國名ハ山城を神字にて記せバ야마시로彼にてもYAMASIRO又武藏を무사시彼にてはMUSASIの如く二合音三合音にてはをファかをクウアの如き類にて勞き學にあるを已が御國のことに貴き本字以て書しをなぞ迂遠なりとせむ本居大人の古事記傳のはじめに抑この記ハもはら古語を傳ふるを旨とせられたる書なれバ中昔ハ物語文などの如く皇國語のまゝに一字も違ずに假名書にこそせらはぼきにいふなるバ漢文にをせられたるぞと云云言ハれしハ信に然ことにて天竺の悉曇ハ四十餘の字もて五千餘巻をも書けしといふ此實に字の少きこそ宜けれ唯文字の多なるハ漢土はこそなり一字ことに義理ありて文をも餝れり然れバ倭語の奴隷として記傳にも便なし皇國學ひ洋學にも漢學の成らざる人等ハらちのあかぬもはなし然れバあながちに韓學のよろしとには非ずそはとまれかくまれ唯我本來ハ正道を守りて靈の真柱太く衝立異端説に諂曲されバハやがて日本魂のはじめなり假令バ道に行に此圖の如く心正直に直日ノ神の幸を受べし心穢く曲れるハ禍津日ノ神はのが態に率るハ最も悲しきなりといふこそ皇國の文字ハ正直にして外國の文字ハ皆



曲斜也これ等をも思ひ合にべし

そはハ衢の道ハ多らる其中ゑ我本来の道ハ一筋といをむ又種ぐさの道ハ繁きに迷へども唯我うアし道一筋りといをむ欲そは心學者ふどの鉄いふをけ登る禁の道を多け也ど同じ雲居の月を見る哉アと雨霰雪や氷と隔つをと解也をおふじ谷川の水といふ俚歌とは甚く異ふれバ是を思ひ混亂をふく唯忠孝道一筋ふ有り是を嚴重ゑ莫忘失○さて又古事記をも復古し神字の真書ゑ寫さでやと按ふ心勤しをれど此ハいうでせむ已幼弱くて學ひ浅く智量ふくたとゑいやしき身ふてらくするをハいうでと進る心も退りわづらひ躊躇をるゑされど此アしふ止ふむを心苦しく人ハ如何ゑ笑譏るとも蹙ひ在べくも非孫バ神の幸ひゑ仰ぎたゝ唯皇道の真心ゑ強ひて忠奮起して此ふをを書つりきさをバ博識人ゑ見をむとにハあらぜ政興ゲ知紀兒童等ふ誨示し且ハ素讀れ為ゑは字義ふ心奪をれず古語のアしを正訓ゑふさしめむとの業ゑこそあを若し謬誤あらバたと識人れ糺定給ハむ事ゑ冀ふふむ尚精く云アし欲をれど丁數もたアさゑふり且を不學愚昧中くふ難竭をれバ概畧のを記したを予ゲ怯くも

微力もてかく努さる情を怜てて勿弃給ひそと

明治四年辛未歳五月廿五日示記しをへ畢

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan